



【こばやし すすむ さん】住吉 / 78歳

●源氏物語の中で、作者の紫式部が当時の社会制度などを批判するようすなどを紹介した評論文「源氏物語の考察」が、市民文芸の会「市民文芸賞」を受賞。また、「源氏物語を読む会」の講師として、たくさんの方が物語を読む活動に取り組んでいる。

千年の時を超え 源氏物語の奥深さを伝える



人のいる風景

SCENERY OF PEOPLE



小林

SUSUMU
KOBAYASHI

進

さん

今

から約千年前に書かれた、世界で最古の創作小説と言われる源氏物語。高等学校の授業などでも読まれています。教科書に載っているのは全54巻からなる小説の一部です。すべて読みとおしたことがある方は、少ないかもしれません。

作者の紫式部が、話の中で伝えたことを紐解くため、この長編小説を数十年にわたり、何度も読み込んでいる小林さん。そのいくつかを紹介した評論文「源氏物語の考察」は、昨年度の市民文芸賞を受賞しました。

源氏物語が書かれた当時は、一人の男性が複数の女性と結婚することが許される「夫多妻制度」の社会でした。小説の中には、夫がほかの妻のこ

ろへ行くときに、送り出す妻が夫に向かって、その悲しさから涙を流し、灰を投げつけるようすが書かれています。「自分のこととして考えたら、だれでも同じ気持ちになりますよね。現実には、千年前の女性の悲しみがどれほど大きくても、その心を表に出すことはできない社会です。そのような時代に、紫式部は小説の中で堂々と、女性の悲しい気持ちを書いているのです」と優しい口調で語ります。

創作の話である源氏物語には、当時の社会に対しての、紫式部の考え方が書かれている場面がたくさんあります。源氏物語を一本の樹木に例えれば、今はまだ、その数本の枝を読み解いているに過ぎないと言います。

「事実を書き残す日記などと違い、小説は文章の裏に作者の思いがこめられています。千年を経てもなお輝く魅力が源氏物語にはあります」と小林さん。たくさんの方が物語を読む機会をつくるため、現在「源氏物語を読む会」が毎月2回開かれています。

この会の講師を務めて18年の小林さんは、だれにでもわかりやすく長編小説を理解してもらいたいと、解説書「源氏物語への誘い」を執筆中です。

「現在は8巻までの解説を書き上げました。今年中に54巻の半分まで書き上げることが目標です。源氏物語を読み込む楽しさと、奥深さを感じてもらいたいですね」と、充実感に満ちた目で語ってくれました。